

富山市内遺跡発掘調査概要VI

—百塚住吉D遺跡・打出遺跡—

2005

富山市教育委員会

富山市内遺跡発掘調査概要VI

—百塚住吉D遺跡・打出遺跡—

2005

富山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、個人住宅建築に伴う平成16年度富山市内遺跡の発掘調査概要報告書である。
- 2 調査は、文化庁の国庫補助事業として富山市教育委員会が実施した。
- 3 本書で報告する遺跡の名称・現地調査期間・整理作業期間・調査面積は次のとおりである。

百塚住吉D遺跡	(現地調査) 平成16年5月6日～平成16年5月25日	210 m ²
	(整理作業)	平成16年5月26日～平成17年3月15日
打出遺跡	(現地調査) 平成16年12月1日～平成16年12月14日	55 m ²
	(整理作業)	平成16年12月15日～平成17年3月15日
- 4 調査は、富山市教育委員会埋蔵文化財センター 学芸員 野垣好史が担当した。
- 5 調査にあたり、富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センターから指導を得た。また、現地調査から報告書作成に至るまでに、内山協一、大場清光、高橋浩二、牧茂春、富山市打出町内会、富山市宮尾町内会の各氏・機関から指導・協力を得た。記して謝意を表します（敬称略）。
- 6 本書で用いる座標系は世界測地系に準拠した。方位は真北、水平水準は海拔高である。
- 7 調査にかかわる原図・写真類および出土遺物は、富山市教育委員会が保管している。
- 8 本書の執筆は、I-2-(1)を富山市教育委員会埋蔵文化財センター 学芸員 堀沢祐一が行い、そのほかは野垣好史が行った。

目　　次

I 百塚住吉D遺跡	II 打出遺跡
1. 遺跡の位置と環境 ······ 1	1. 遺跡の位置と環境 ······ 8
2. 調査の経緯と経過 ······ 2	2. 調査の経緯と経過 ······ 9
(1) 調査に至る経緯 ······ 2	(1) 調査に至る経緯 ······ 9
(2) 調査の経過 ······ 2	(2) 調査の経過 ······ 9
3. 調査の成果 ······ 4	3. 調査の成果 ······ 10
(1) 概要 ······ 4	(1) 概要 ······ 10
(2) 基本土層 ······ 4	(2) 基本土層 ······ 10
(3) 遺構 ······ 4	(3) 遺構 ······ 10
(4) 遺物 ······ 6	(4) 遺物 ······ 15
4. まとめ ······ 7	4. まとめ ······ 18
	(1) 遺構の時期と性格 ······ 18
	(2) 地割について ······ 19
	写真図版 ······ 21
	報告書抄録 ······ 28

I 百塚住吉D遺跡

1. 遺跡の位置と環境

百塚住吉D遺跡は、富山市街地から北北西へ約3.5km、市北西部の富山市宮尾地内に所在する。約700m東側には神通川が流れ、本遺跡はこの神通川の旧流路下流左岸の河岸段丘上に立地している。南西には富山平野を呉東と呉西に二分する呉羽山丘陵が約7kmにわたって北東-南西方向に延び、本遺跡に近い丘陵の北部は長岡台地と呼ばれる台地状地形が広がる。ここは市内でも遺跡の密集地帯の一つに挙げられる。西側及び北側は沖積平野が形成され、現在は水田を中心とした景観が広がっている。

こうした自然環境のなかで、本遺跡周辺では旧石器時代から各時代の遺跡が連続と形成されてきている。

旧石器時代の遺跡は、呉羽山丘陵一帯で石器のみが単独または数点で出土するというかたちで見つかっている。縄文時代前期には丘陵直下の平野部で小竹貝塚や楓ヶ森貝塚などがみられ、海進によって形成された潟湖が丘陵のすぐ近くまで広がっていたことがわかる。縄文時代中期以降は、呉羽山丘陵付近を中心に数多くの遺跡が確認されている。このうち長岡台地に立地する北代遺跡は、200棟以上の竪穴住居の存在が推定される中期後業を中心とした大規模な集落遺跡である。弥生時代末から古墳時代にかけては、呉羽山丘陵上に古墳や横穴など多数の墳墓が各時期を通じて築かれる。また、本遺跡の過去の調査では古墳時代前期を中心とする土器や碧玉製の管玉が出土し、隣接する百塚住吉B遺跡では古墳時代後期の須恵器や管玉が採集されている。

古代に入ると遺跡数は大きく増加し、本遺跡では掘立柱建物、北代遺跡や呉羽富田町遺跡では竪穴住居や掘立柱建物、鍛冶遺構をもつ集落が確認されている。長岡杉林遺跡からは平安時代中期の瓦塔をはじめとした仏教的色彩をもつ遺物が出土し、祀堂の存在が推定される。中世には海岸部近くの低地に立地する四方北窪遺跡、四方荒屋遺跡などで集落が確認され、港町に関連した性格が考えられている。



1.百塚住吉D遺跡 2.百塚住吉C遺跡 3.百塚住吉B遺跡 4.百塚住吉B遺跡 5.百塚住吉遺跡 6.杉板古墳群
7.八町II遺跡 8.長岡杉林遺跡 9.北代東遺跡 10.北代遺跡 11.北代加茂下III遺跡 12.呉羽富田町遺跡 13.茶屋町遺跡
14.北代中尾遺跡 15.楓ヶ森貝塚 16.小竹貝塚 17.呉羽三ツ塚遺跡

第1図 百塚住吉D遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

2. 調査の経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

百塚住吉D遺跡は、昭和63年～平成3年の分布調査で初めて確認され、平成5年3月富山市教育委員会発行の『富山市遺跡地図』に遺跡No183として登載された。埋蔵文化財包蔵地の範囲は106,000m²である。

本遺跡は平成8年に個人住宅建築に伴う発掘調査を実施し、奈良時代の集落を中心として、縄文時代から平安時代までの土器などが出土した（鹿島1997）。

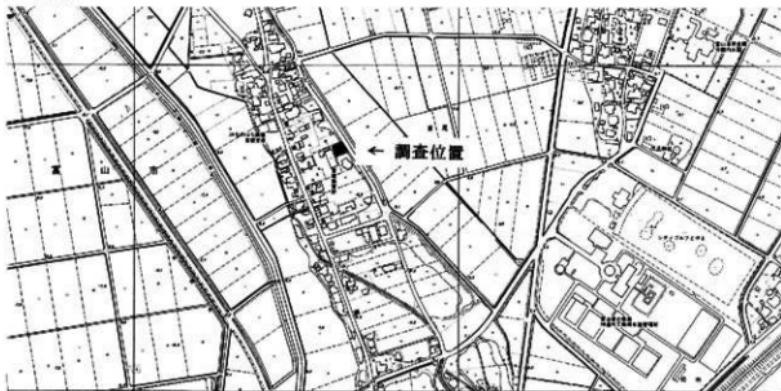
平成16年2月10日、富山市宮尾地内において、個人住宅建設について埋蔵文化財所在の照会がなされた。建設予定地は全域（329m²）が埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、試掘確認調査を行うこととなった。試掘確認調査は同年3月26日に実施し、工事区域のうち230m²に遺跡の所在が確認された。古代の土坑・ピットが検出され、須恵器・土師器が出土した。

試掘確認調査の結果に基づき、工事主体者と建設にかかる埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、基礎工事が遺跡面に達することから、住宅建築にかかる210m²について発掘調査を行うこととなった。調査は同年5月6日から同月25日に行った。

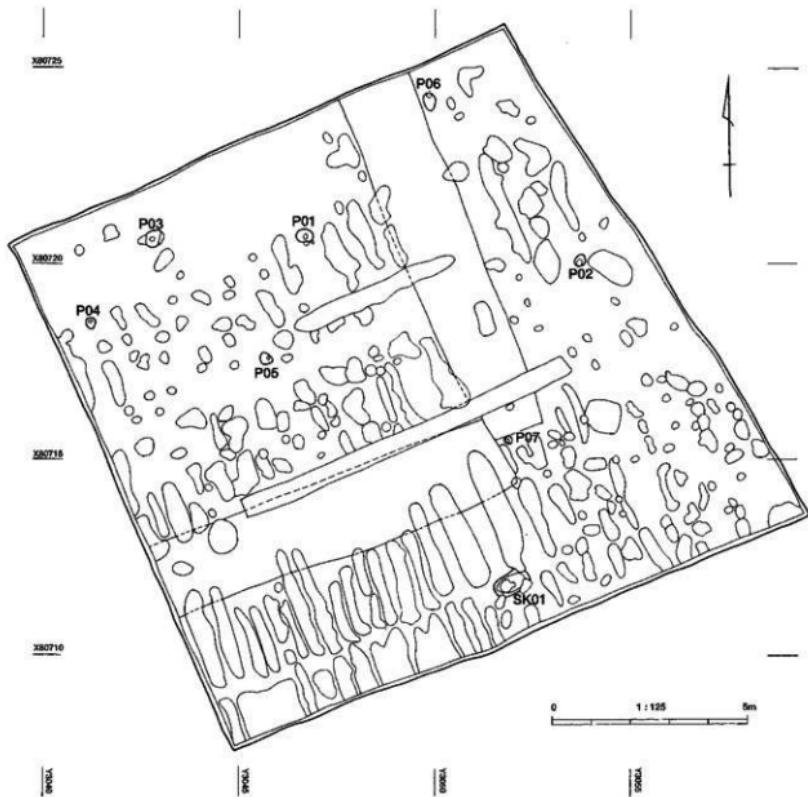
(2) 調査の経過

平成16年5月6日より発掘調査を開始した。表土除去はバックホウを用いて行い、表土除去完了後の7日から人力による遺構検出作業を行った。その結果、調査区のほぼ全域に畑の耕作による搅乱がおよぶことを確認した。遺構覆土は、搅乱に比べて暗い色調を呈し、いずれであるかについては遺構を検出した段階で比較的容易に識別できた。11日より遺構掘削と合わせ、搅乱部の掘削も開始した。検出した遺構は出土土器からいずれも古代に属すると判断された。また、掘削作業と合わせて、測量・図面作成作業も併行して行った。遺構掘削完了後の24日にラジコンヘリによる空中写真撮影を実施し、25日に調査を完了した。

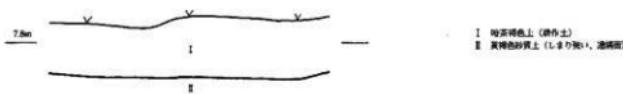
遺物整理作業・報告書作成作業は、現地発掘調査終了後から平成17年3月15日まで行った。



第2図 百塚住吉D遺跡調査位置図 (1:7,500)



第3図 百塚住吉D遺跡調査区全体図



第4図 百塚住吉D遺跡基本土層図（1:20）

3. 調査の成果

(1) 概要

確認された遺構は土坑1基、ピット7基で、遺構密度は低い。出土遺物は古代の土師器・須恵器で、いずれも細片である。調査区内は最近まで畑地として利用されていたため畝状の搅乱や、畑以前の建物の基礎による搅乱が全域に及んでいた。明らかに搅乱と考えられるものについては全掘しなかった。

(2) 基本土層

調査区内は畑の耕作土直下で遺構面が確認され、遺物包含層は認められなかった。SK01の遺構の残存状況をみると、調査区内は人幅に削半されていることが推測できる。

I層は暗茶褐色の耕作土（表土）である。古代の土師器・須恵器片を含む。

II層はI層直下で検出された黄褐色砂質層で、遺構面である。標高は7.5m～7.7mで、東に向かって高さをやや減じる。調査時にはII層上面から20～30cm掘削したところで湧水があった。

(3) 遺構

土坑 調査区南部で1基検出した。

SK01 長軸0.95m、短軸0.55mの長円形を呈する。深さは約0.05mで、皿状の断面形態となる。中央には円形の搅乱が及んでいた。覆土は炭化物をわずかに含み、土師器片が出土した。

ピット 調査区北部を中心で7基検出した。柱列の配置は認められない。

P01 長軸0.42m、短軸0.35mの長円形を呈し、深さは0.5mである。覆土上層から土師器片が1点出土した。

P02 長軸0.36m、短軸0.27mの長円形を呈し、深さは0.23mである。遺物は出土していない。

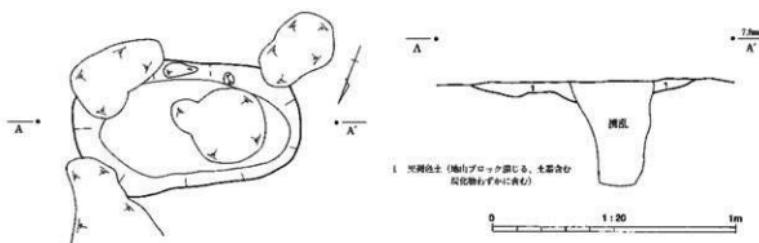
P03 長軸約0.52m、短軸0.42mの長円形を呈し、深さは0.3mである。覆土上層から土師器片が3点出土した。

P04 直径約0.25mの円形を呈し、深さは0.3mである。遺物は出土していない。

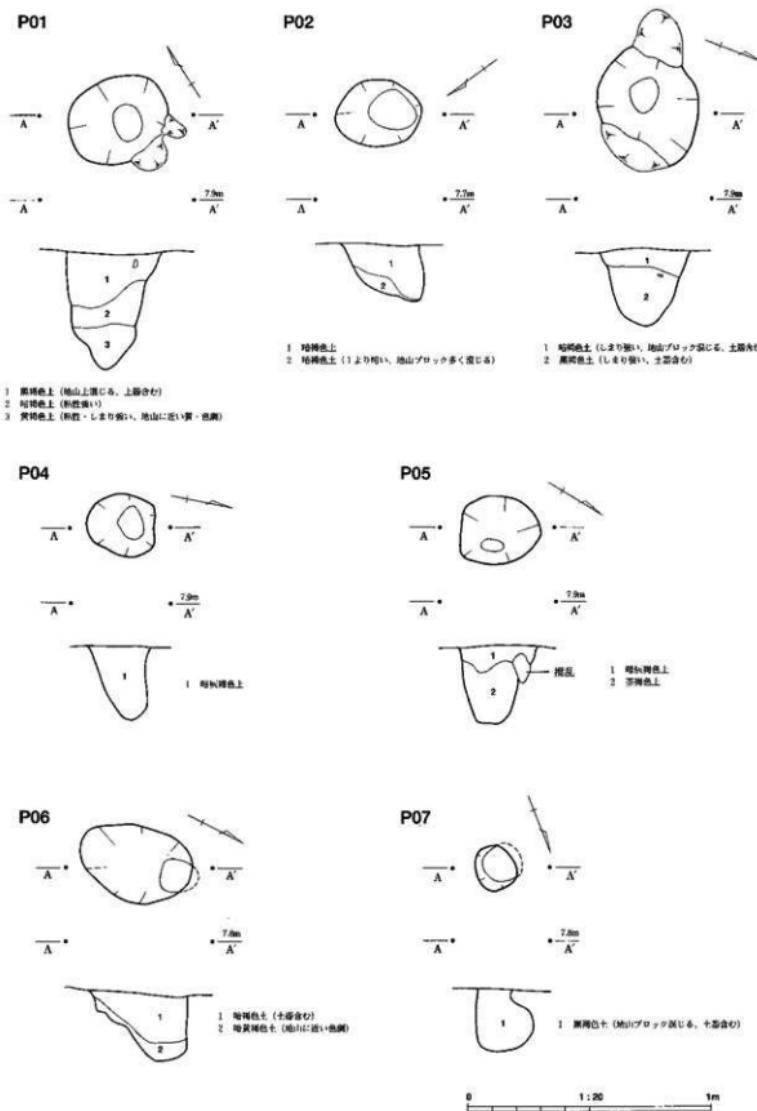
P05 長軸0.32m、短軸0.28mの長円形を呈し、深さは0.32mである。遺物は出土していない。

P06 長軸0.47m、短軸0.31mの長円形を呈し、深さは0.27mである。覆土上層から土師器片が3点出土した。

P07 直径約0.17mの円形を呈し、深さは0.25mである。壁面西部は大きくオーバーハングしている。覆土上層から土師器片が2点出土した。



第5図 百塚住吉D遺跡 SK01 平面図・土層断面図



第6図 百塚住吉D遺跡 P01～07平面図・土層断面図

(4) 遺物

土師器・須恵器が出土した。いずれも古代に属すると判断される。遺構出土遺物のほかに表土、搅乱内からも同様の時期の遺物が出土した。第7図6・12は須恵器、その他は土師器である。

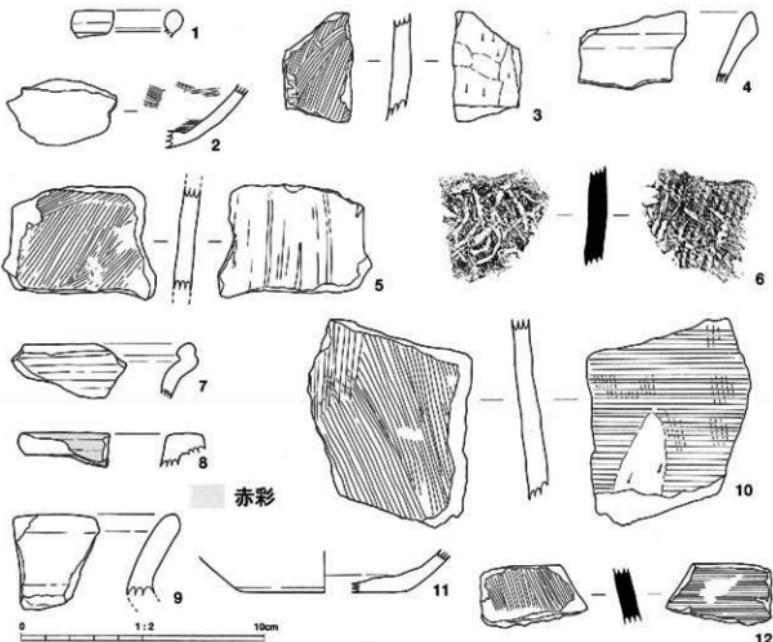
SK01 1は壺の口縁部である。端部は丸く肥厚している。

P03 2は壺の底部付近である。外面は全面縦に覆われており、内面にはわずかにハケメがみえる。

P06 3は壺の体部である。外面は縦方向のケズリ、内面は縦方向のハケメを施す。

表土 4は壺または鍋の口縁部と思われる。端部は外側がやや肥厚している。5は壺または鍋の体部と思われる。外面にはケズリによるとみられる縦方向の条線、内面は斜め方向のハケメを施す。6は壺の体部である。外面は平行タタキ目文、内面は同心円の当て具痕がみられる。

搅乱内 7は壺の口縁部である。口縁部は外反した後、屈曲して内傾し、端部は丸くおさめる。8は器種不明であるが、口縁部と思われる。内外面に赤彩を施す。9は壺または鍋の口縁部と思われる。内外面ともにナデ調整を施す。10は壺の体部である。外面は縦方向のハケメの後、カキメを施す。下部には上から下方向へのケズリがみられる。内面は縦方向のハケメを施す。11は小型壺の底部である。12は壺または壺の体部と思われる。外面は細密なカキメ、内面は縦方向のハケメを施す。



第7図 百塚住吉D遺跡出土遺物

4.まとめ

今回の調査で検出した遺構は、古代の土坑1基、ピット7基である。詳細な時期を検討するための手がかりは少ないが、まず出土土器から遺跡の時期を考えてみたい。

出土土器のうち、詳細な時期を知るうえで最も有効と思われる資料は、第7図7の壺の口縁部である。この口縁部は外反した後、屈曲して内傾する形態であり、北陸西部の古代土器年輪（田嶋1988）のVI期に該当する。また、SK01出土の土器（第7図1）もおそらくこれに近い形態をとる口縁部と思われる。したがって、少なくともSK01については9世紀後半～10世紀前半の時期に属する可能性が高い。ただし、第7図10のような体部外側にカキメ、ヘラケズリ、内面にハケメを施す個体は9世紀中頃には少なくなるようであり（宮田1988）、これ以前に遡る遺構も考えられる。

出土土器は、大半が壺または鍋などの土器類の煮炊具である。壺または壺とみられる須恵器の貯蔵具も、数は少ないながら出土している。また、第7図2のような煤が大量に付着した土器壺がみられることは、調査地付近が生活の場として利用されていたことをうかがわせる。搅乱のため検出した遺構数は少ないものの、調査区内に堅穴住居等の居住施設が存在していた可能性も十分考えられる。また、今回の調査で検出したピットは、柱列配置や柱痕こそ確認されていないが、本来、掘立柱建物を構成していた柱穴になるものがあるかもしれない。

本遺跡の南東約200mの地点では、奈良時代を中心とした集落が確認された（庵島1997）。また、本遺跡の南約200mに位置する百塚住吉遺跡では奈良・平安時代の掘立柱建物が検出され（富山市教委2001）、別地点の試掘確認調査では弥生時代後期～古墳時代前期の土器が出土している。南に隣接する百塚住吉C遺跡では、平安時代前期の双耳瓶が採集されている。古墳時代では、本遺跡で前期を中心とした土器や管玉等が出土し、百塚住吉B遺跡では後期の短頸壺が採集されている（庵島1997）。

以上のように、本遺跡の立地する河岸段丘付近では、古墳時代以降に継続して人為活動の痕跡を認めることができる。ただし、古墳時代の集落は積極的には認めにくく、本格的な集落形成は奈良・平安時代以降である。一方、南西の台地周辺でも奈良時代以降、集落が大きく増加することが確認される。長岡杉林遺跡の奈良期集落では堅穴住居、掘立柱建物、銀治工房等が検出され、開墾集落の一と推定されている（富山市教委1987）。北代遺跡や吳羽富田町遺跡でも長岡杉林遺跡と同様の遺構群が確認され、同じ性格を有する集落と考えられる。こうしてみると、本遺跡周辺の河岸段丘上の遺跡群も沖積平野を背景に形成された開墾集落に含められる可能性が高い。今回の調査で確認した遺構・遺物も、こうした遺跡群の展開過程のなかで把握できると考えられる。

＜参考文献＞

- 庵島昌也 1997 「百塚住吉D遺跡」『富山市考古資料館報』第31号 富山市考古資料館
- 田嶋明人 1988 「古代土器年輪の設定」「北陸古代土器研究の現状と課題」石川考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 富山市教育委員会 1987 「長岡杉林遺跡」
- 富山市教育委員会 1998 「富山市農田大塚遺跡発掘調査概要」
- 富山市教育委員会 2001 「富山市百塚住吉遺跡発掘調査報告書」
- 宮田進一 1988 「越中の古代後半期の土器」『北陸古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

II 打出遺跡

1. 遺跡の位置と環境

打出遺跡は、富山市街地から北北西へ約7km、市北西部の富山市打出地内に所在する。遺跡は神通川下流左岸の低湿地上に立地し、調査地の標高は約2mを測る。調査地は現在の神通川から西に約2.5km、海岸汀線から南に約300mの地点に位置する。

神通川は今までに度々流路の変更を繰り返し、「越中旧事記」によれば現在の流路は江戸時代万治年間の洪水を契機に形成されたとされる。これ以前には現流路より西側に神通古川、さらに(神通)古古川(別名カンの川)と呼ばれた旧流路が存在しており、本遺跡の北東部では発掘調査によってこの(神通)古古川の流路跡が確認されている。また、江戸時代前期頃までは海岸線が現在より北側にあったことが推定されている。

縄文時代中期以降、周辺の低湿地では遺跡の存在が知られるようになるものの、遺物のみ出土する例が多く、積極的な集落の形成は認めにくい。本格的な集落形成は弥生時代中期から古墳時代前期にかけて始まる。江代削遺跡、四方荒屋遺跡では当該期の堅穴住居が検出され、いずれの遺跡も弥生時代後期に起こった洪水で集落は一度埋没するが、弥生時代末～古墳時代初頭になって再び営まれる。古代には、四方荒屋遺跡、四方北窪遺跡などで集落が確認されている。対岸である神通川右岸の河岸段丘上には、米田大覚遺跡、豊田大塚・中吉原遺跡といった官的施設と考えられる遺跡が存在しており、この時期周辺の遺跡数は大きく増加する。また、平成16年度の道路改良工事に伴う本遺跡東部の発掘調査では、両側に側溝をもつ道路跡が検出されており、注目される。中世では、四方荒屋遺跡や四方北窪遺跡で調査が行われ、掘立柱建物や陶磁器等が確認されている。陶磁器は珠洲、瀬戸美濃、青磁など各地の資料が出土し、立地環境からは港町としての性格が考えられている(富山市教委ほか1999)。四方北窪遺跡では畑跡とみられる小溝群や道路跡が検出されるなど、当時の集落の様相が明らかになりつつある。



第8図 打出遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)

2. 調査の経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

打出遺跡は、昭和 63 年～平成 3 年の分布調査で初めて確認され、平成 5 年 3 月富山市教育委員会発行の『富山市遺跡地図』に遺跡 No.9 として登載された。埋蔵文化財包蔵地の範囲は 544,000 m²である。

本遺跡は平成 15・16 年の 2 年にわたって、道路改良工事・土地区画整理事業に伴う発掘調査が実施されている。調査では弥生時代後期～江戸時代に至る集落が確認され、堅穴住居や掘立柱建物などの居住施設のほか、古代～近世の道路跡等が検出されている。

平成 16 年 9 月 21 日、富山市打出地内において、個人住宅建設にかかる埋蔵文化財所在の照会がなされた。建設予定地の水田は、全域 (661 m²) が埋蔵文化財包蔵地に含まれていたため、試掘確認調査を行うこととなった。11 月 8 日に試掘確認調査を行った結果、全域に遺跡の所在が確認された。調査では弥生時代末～古墳時代初頭と中世の遺構・遺物が確認された。

試掘確認調査の結果に基づき、工事主体者と埋蔵文化財の取扱いについて協議した結果、周囲の擁壁の南側部分が遺跡面の深度に達するため、この部分の 55 m²を対象に発掘調査を行うこととなった。調査は同年 12 月 1 日から同月 14 日まで実施した。

(2) 調査の経過

12 月 1 日より発掘調査を開始した。表土除去はバックホウにより行った。2 日から人力掘削による遺物包含層掘削・遺構検出作業を行い、その後、遺構掘削作業を開始した。西部で検出した溝群では弥生時代末～古墳時代初頭の遺物、東部の 3 条の溝からは中世の遺物が出土し、大きく 2 つの時期の遺構が存在することが明らかとなった。なお、中世の遺構については、壁面の精査により黄褐色地山面の上の黒褐色土より掘り込まれていることを確認した。遺構掘削作業と併行して、測量・図面作成作業も行い、同月 10 日には遺構掘削を終え、全景写真を撮影した。13 日に調査を完了した。

遺物整理作業・報告書作成作業は、現地発掘調査終了後から平成 17 年 3 月 15 日まで行った。



第 9 図 打出遺跡調査位置図 (1:7,500)

3. 調査の成果

(1) 概要

調査区からは弥生時代末～古墳時代初頭と中世の2時期の遺構・遺物が確認された。検出遺構は、弥生時代末～古墳時代初頭では溝7条、土坑2基、ピット2基、中世では溝3条、土坑3基、ピット3基である。調査区内は近現代の搅乱、また樹木によるとみられる根搅乱が一部確認された。近現代の搅乱については全掘しなかった。

なお、調査は弥生時代末～古墳時代初頭の遺構面（黄褐色シルト層）まで重機および人力により掘削を行ったが、壁面を精査したところ、中世遺構は黄褐色地山面の上の黒褐色土層より掘り込まれていることが明らかとなった。このため各遺構の説明では、土層断面により中世遺構面からの深さがわかるものについては、その深さを記述している。壁面にかかっていない遺構は、付近の黒褐色土層の厚さを考慮して推定の深さを記した。

(2) 基本土層

基本土層は大きく4層に分けることができる。

I層は暗灰褐色の水田耕作土で、酸化鉄がやや混じる。

II層は灰茶褐色の床土である。中世を中心とした遺物をわずかに含む。

III層は黒褐色シルト層で、中世の遺構面である。同層は弥生時代末～古墳時代初頭の遺物を含み、当該期の遺物包含層にも相当する。標高は中央部が低く、東西方向で若干高い。

IV層は黄褐色シルト層で、弥生時代末～古墳時代初頭の遺構面である。調査時にはここから20～30cm掘削したところで湧水があった。III層と同様、標高は中央部が低く、東西方向で若干高くなる。

(3) 遺構

① 弥生時代末～古墳時代初頭の遺構

溝 調査区西部で平行して延びる6条の溝を検出した。主軸は約N-55°～65°-Eでほぼ一致し、規模や間隔に類似性が認められることから全体として溝群を形成していた可能性が高い。このほか東部でも同様の溝を1条 (SD07) 確認した。

SD01 検出長約2.3m、幅0.65～0.81m、深さ約0.15mである。遺物は出土していない。

SD02 検出長約2.3m、幅0.36～0.45m、深さ約0.1mで、底面は細かな凹凸がある。中世ピットP05に切られている。弥生時代末～古墳時代初頭とみられる土器が出土した。

SD03 検出長約1.7m、最大幅0.25m、深さ約0.1mで、他の溝に比べるとやや細く、また調査区内で終息している点が異なる。遺物は出土していない。

SD04 検出長約2.4m、幅0.15～0.74m、深さ約0.1mで、不整形を呈する。底面には細かな凹凸がある。弥生時代末～古墳時代初頭とみられる土器が出土した。

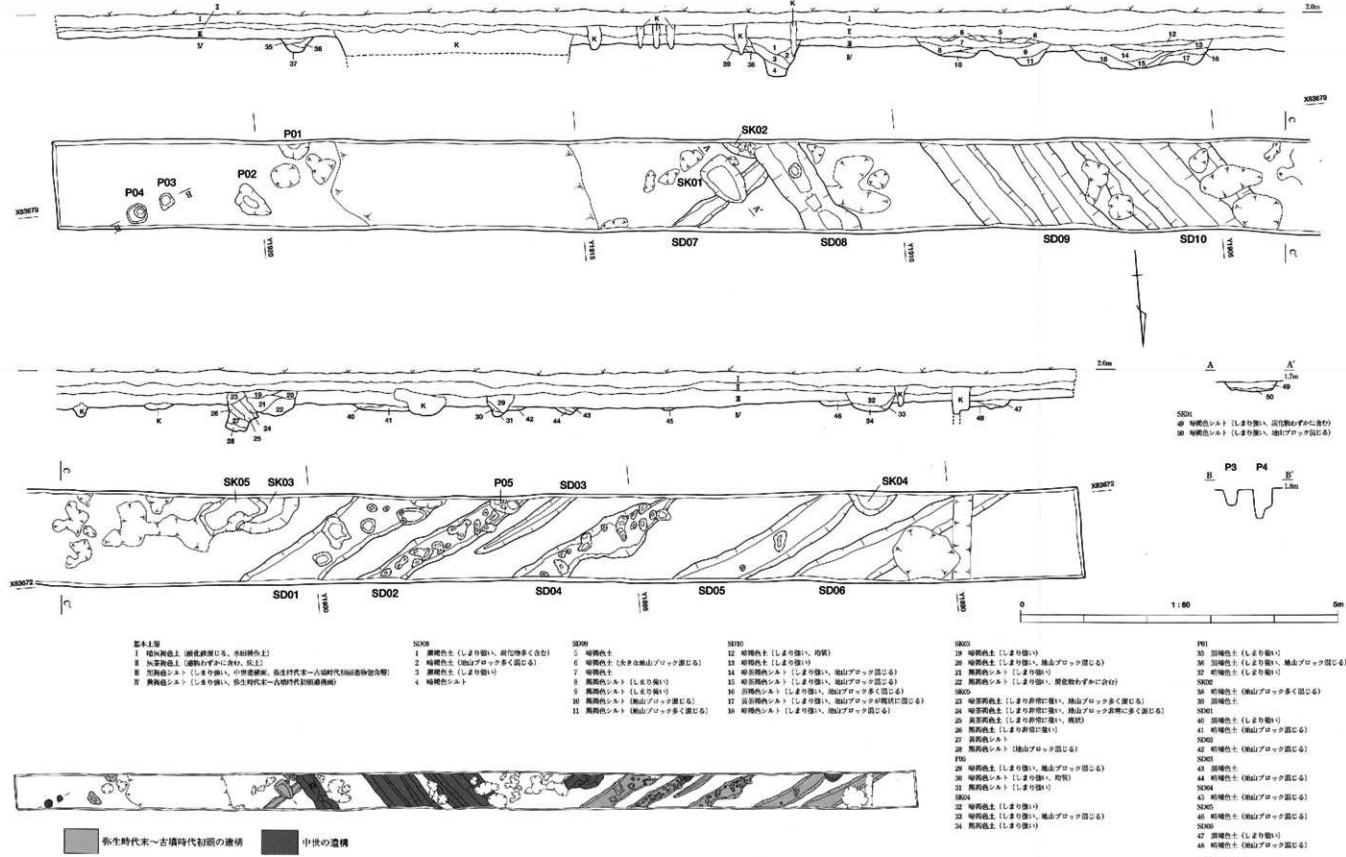
SD05 検出長約2.4m、幅0.5～0.62m、深さ約0.1mである。中世土坑SK04によって切られている。弥生時代末～古墳時代初頭とみられる土器が出土した。

SD06 検出長約2.7m、幅0.44～0.67m、深さ約0.1mで、南西部に向かって細くなる。一部近現代の搅乱が及んでいる。弥生時代末～古墳時代初頭とみられる土器が出土した。

SD07 検出長約1.6m、幅0.23～0.33m、深さ約0.05mである。中世溝SD08、弥生～古墳期土坑SK01に切られている。弥生時代末～古墳時代初頭とみられる土器が出土した。

土坑 調査区東部で2基検出した。

SK01 長軸0.82m、短軸0.5mの長円形を呈し、深さは0.15mである。弥生時代末～



第10図 打出遺跡遺構平面図・土層断面図

古墳時代初頭とみられる土器が出土した。

SK02 一部分のみ確認した。規模は0.5m以上、深さは0.1mである。中世溝SD08に切られている。遺物は出土していない。

ピット 調査区東部で2基検出した。

P01 北半部のみ確認した。直径0.45mの円形を呈すると推定される。深さは0.25mである。遺物は出土していない。

P02 長軸0.63m、短軸0.35mの不整形プランを呈する。深さは0.15mである。弥生時代末～古墳時代初頭とみられる土器が出土した。

②中世の遺構

溝 調査区中央東寄りで3条検出した。主軸は約N-30°~40°-Wである。

SD08 検出長約1.7m、幅0.58~0.7m、中世遺構面からの深さは約0.6mである。掘り込み角度は深く、断面は逆台形状を呈する。底面は中央南寄りに約0.15mの高まりがあり、北部には深さ約0.1mの小穴がある。珠洲、鉄滓が出土したほか、弥生時代末～古墳時代初頭の土器が覆土下層から出土した。混入と思われる。

SD09 検出長約1.7m、幅1.55m、中世遺構面からの深さは約0.45mである。底面中央には土手状の高まりが溝の主軸に平行して延びる。これを境に東西で底面の深度が異なっており、西部の方が深い。珠洲が出土したほか、弥生時代末～古墳時代初頭の土器も混入していた。

SD10 検出長約1.7m、幅1.7m、中世遺構面からの深さは約0.45mである。壁面は緩やかながらも途中で角度を変え、段状に掘り込まれている。底面はほぼ平坦である。珠洲、瀬戸美濃が出土したほか、弥生時代末～古墳時代初頭の土器も混入していた。

土坑 調査区西部で3基検出した。

SK03 北半部のみ確認した。直径約1.2mの円形を呈すると推定される。中世遺構面からの深さは0.4mである。断面形態は底面が緩やかに弧を描く半円形となる。最下層の第22層はわずかに炭化物を含む。中世土師器が出土したほか、弥生時代末～古墳時代初頭の土器も混入していた。

SK04 北半部のみ確認した。直径約0.9~1.0mの円形を呈すると推定される。中世遺構面からの深さは0.3mである。断面形態は底面が緩やかに弧を描く半円形となる。形態、覆土とともにSK03との類似性が強く、相互に関連する遺構の可能性がある。弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土したが、混入と考えられる。

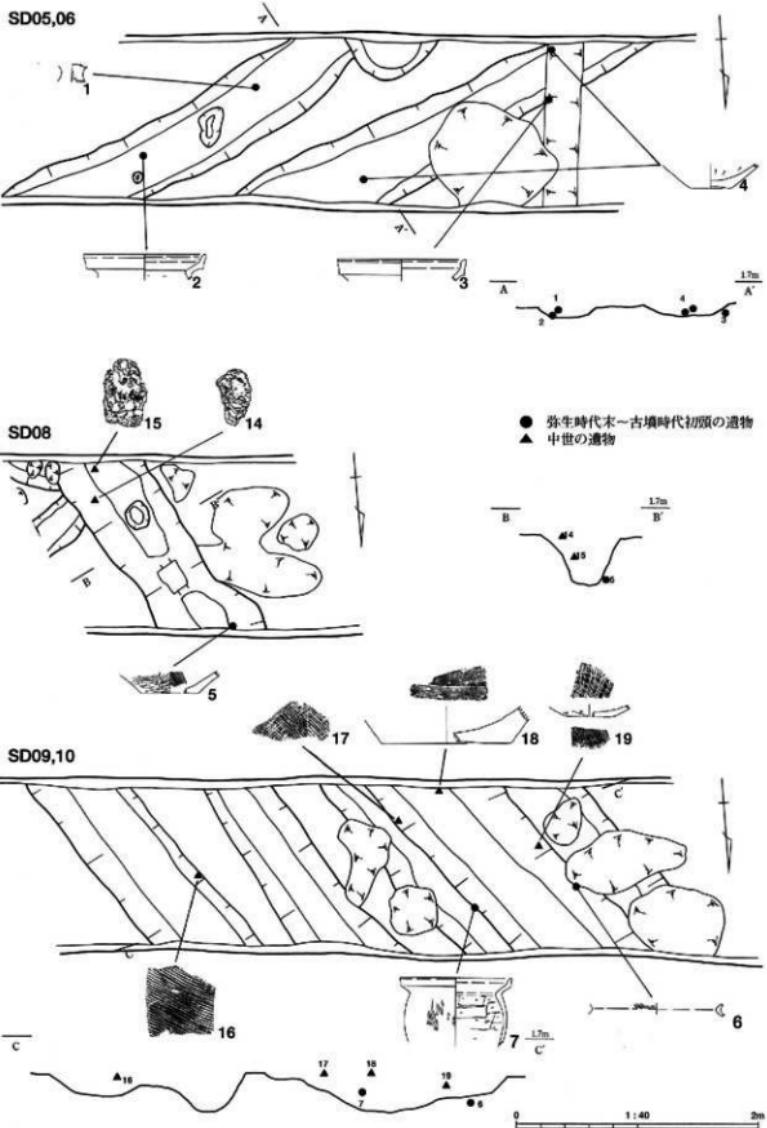
SK05 SK03に切られる。長辺0.95m、短辺0.55mの長方形を呈し、中世遺構面からの深さは約0.6mである。底面には深さ約0.1mの小穴が斜めに掘られている。覆土は地山ブロックを多量に含み、他の遺構覆土とは様相が異なる。覆土は固くしまり、人為的に埋められた可能性がある。弥生時代末～古墳時代初頭の土器が出土したが、混入と考えられる。

ピット 調査区西部と東端部で合わせて3基検出した。

P03 直径約0.22mの不整円形を呈する。中世遺構面からの深さは約0.35mと推定される。中世土師器が出土した。

P04 直径0.3mの円形を呈する。中世遺構面からの深さは約0.55mと推定される。底面は一段深く掘り込まれており、柱穴の可能性が考えられる。遺物は出土していない。

P05 長径0.45m、短径0.3mの長円形を呈する。中世遺構面からの深さは約0.4mである。底面には凹凸がある。中世土師器が出土した。



第11図 打出遺跡遺物出土状況図

(4) 遺物

①弥生時代末～古墳時代初頭の遺物

いずれも土器である。当該期の遺構、遺物包含層からの出土土器（第12図1～4、9～13）のほかに、中世遺構からも混入とみられる土器（第12図5～8）が出土した。

SD05 1は高杯の杯部・脚部の接合部と考えられる。脚が八の字状に聞く形態のものと推定できるが、蓋のつまみ部の可能性もある。2は無文有段口縁壺である。頸部は屈曲し、口縁部はやや外傾して立ち上がる。

SD06 3は無文有段口縁壺である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部内面には面を作っている。4は壺の底部である。内面には下→上方向へのケズリがみられる。底面は浅く凹んでいる。

SD08 5は壺の底部である。体部はわずかに外湾して立ち上がる。外面は横方向の単位の大きいミガキ、内面は斜め方向のハケメを施す。

SD10 6は壺の頸部である。頸部は屈曲し、外面には斜め方向のハケメを施す。7は無文有段口縁壺である。口径は体部径を上回る。頸部は鋭く屈曲し、口縁部はやや外傾して短く立ち上がる。体部外面には縦方向の粗いハケメ、内面は横方向のケズリを施す。

SK04 8は壺の底部と考えられる。体部はほぼ直線的に立ち上がる。外面には縦方向のハケメを施す。

包含層 9は器種不明であるが、口縁部と思われる。端部から約1cm下に径2mmの孔が外面から内面に向かって穿たれている。また、外面右下の割れ口部分にも同様の孔の痕跡がある。内面はヨコナデを施す。10・12は無文有段口縁壺である。10は口縁部がやや外傾して立ち上がり、端部付近でわずかに外反する。12は頸部の屈曲が弱く、口縁部はほぼ垂直に短く立ち上がる。外面はヨコナデ、内面は頸部より上にヨコナデ、下にハケメを施し、部分的にケズリの痕跡もみえる。11は壺の頸部である。頸部の屈曲は弱い。外面に斜め方向のハケメを施す。13は壺または鉢の底部である。底部付近で厚みがやや減じる。

②中世の遺物

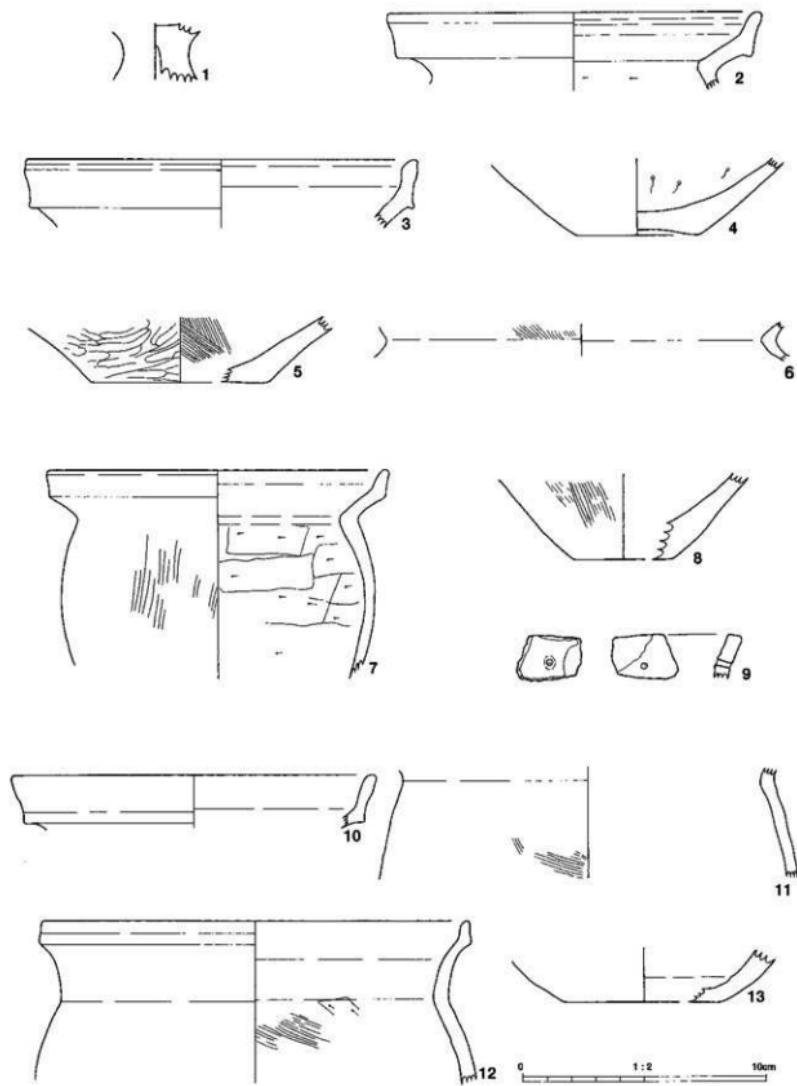
各種の土器のほかに鉄滓、陶製円板が出土した。溝出土の遺物が主体で、一部包含層出土のものがある。

SD08 14・15は鉄滓である。重量はそれぞれ92.86g、132.31gである。15の表面には木質が部分的に付着している。

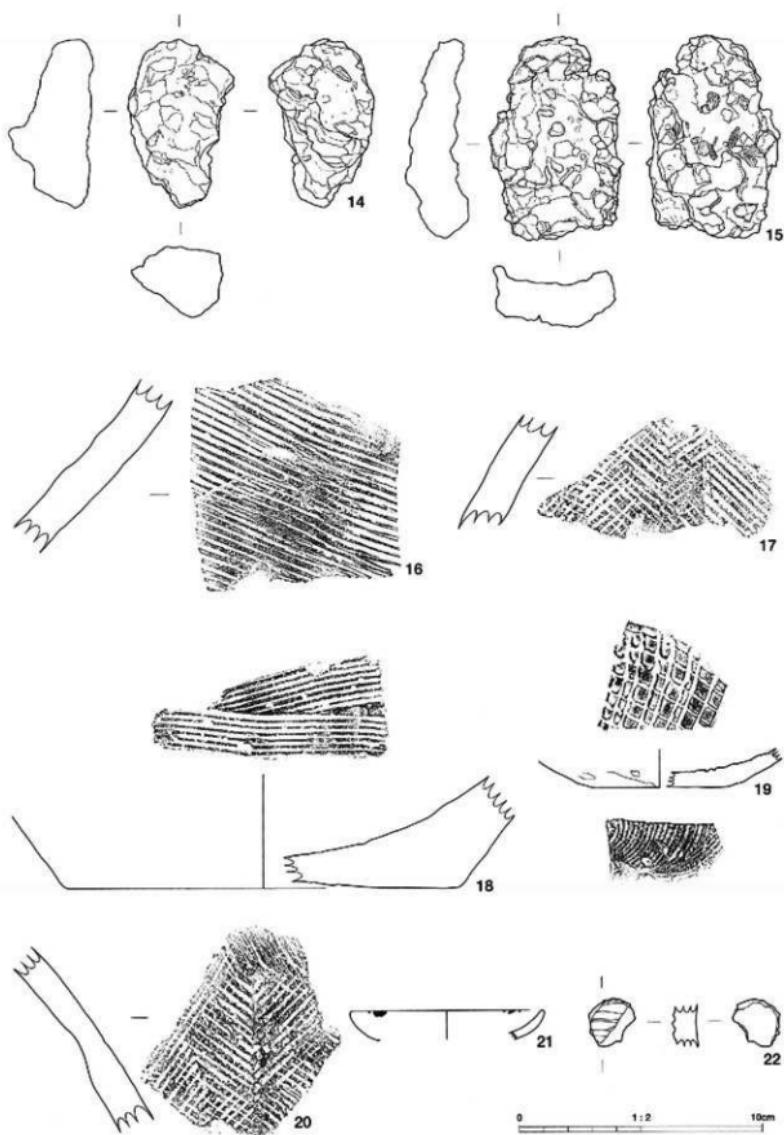
SD09 16は珠洲壺の体部である。胎土には海綿骨針が多く含む。

SD10 17は珠洲壺の体部である。外面には格子状の叩き目を施す。18は片口鉢の底部である。底部の切り離しは静止糸切りである。内面の卸し目は上部に一部入っていない箇所があり、これから判断すると施入密度は高くなかったと推定される。19は瀬戸美濃卸皿の底部である。外面には灰釉を施す。底部の切り離しは回転糸切りである。

包含層 20は珠洲壺の体部である。外面は格子状の叩き目を施し、内面には当て具痕が明瞭に残る。21は中世土師器の小皿である。口縁端部には一部煤が付着しており、灯明皿として使用されたと考えられる。22は珠洲を転用した陶製円板である。一部欠損しているものの円形を呈すると推定される。



第12図 打出遺跡出土遺物（1）



第13図 打出遺跡出土遺物 (2)

5. まとめ

(1) 遺構の時期と性格

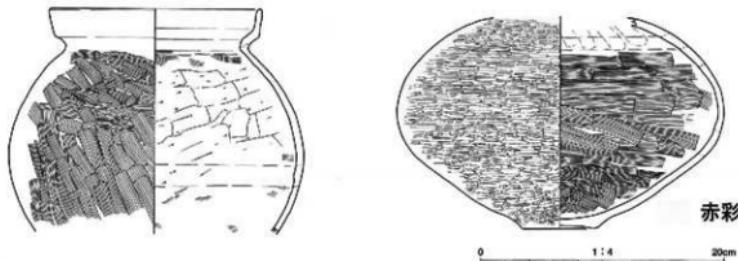
本遺跡からは弥生時代末～古墳時代初頭と中世の2時期の遺構が確認された。ここではこれらの遺構の時期と性格について検討する。

まず弥生時代末～古墳時代初頭の遺構の詳細な時期についてであるが、出土土器のうち個体数の多い甕に注目すると、いずれも有段口縁を有している。口縁部の形態からみると概ね月影式に相当する時期が中心と考えられる。市内では飯野新屋遺跡でこの時期の土器(月影II式)が出土している(富山市教委1987)。ただし、飯野新屋遺跡例と比較すると、本遺跡例は有段部の幅が狭く、口縁の外反度も小さい。当該期の土器は新しくなるほど有段部の幅・外反度が増すため(高橋2000)、本遺跡出土土器については古相(月影I式)を示すと考えられる。なお、第14図は試掘確認調査時に地山直上で出土した土器である。これらも月影式のI段階に比定できると考えられる。

この時期の遺構で注目されるのは、調査区西部で検出した平行する溝群である。上記の飯野新屋遺跡では本遺跡例に似た同時期の溝群が検出され、畑跡と推定されている。また、富山市上新保遺跡では古代の同様の溝群からプラントオバール分析により陸稲が検出され、畑跡とされている(富山市教委2000)。底面の凹凸や規模も本遺跡例と似ている。このようにみると、全体の様相は不明確ながら、本遺跡の溝群も畑跡である可能性が高い。本遺跡に近い四方北窪遺跡では中世の畑跡とみられる遺構が確認されており、古くからこの付近が畑作に適した生産の場として利用してきたことがうかがえる。

中世の遺構については、時期を詳細に検討できる資料に恵まれていない。珠洲を手がかりにおおよその時期を探ると、吉岡編年(吉岡1994)のⅢ～Ⅳ期に相当すると考えられる。各遺構で時期差が存在した可能性もあるが、明確ではない。

中世の遺構は3条の溝が主体である。試掘確認調査時にはSD08につながるとみられる溝とこれに直交する方向に延びる溝を確認しており、区画溝と考えられる。四方荒屋遺跡(富山市教委ほか1999)や本遺跡東部の道路改良工事に伴う調査では区画溝に囲まれた屋敷跡が確認されていることから、今回の調査で検出した溝等も同様の性格を有する遺構の可能性が高い。本調査区では明確な居住施設の痕跡は確認できなかったものの、P04のようなピットが孤立柱建物を構成する柱穴である可能性は十分考えられよう。四方荒屋遺跡、四方北窪遺跡は中世岩瀬濱の港町と推定されており(富山市教委ほか1999)、遺跡の立地状況を考え合わせると、今回の調査で確認した遺構・遺物についてもこれらと関連付けて考えることができるかもしれない。



第14図 打出遺跡試掘確認調査出土土器

(2) 地割について

次に検出した遺構を手がかりに、調査地付近の地割について検討する。

今回の調査で確認した弥生時代末～古墳時代初頭の畠跡とみられる溝群の走行方向は約N-55°～65°-Eであり、一方、中世の区画溝については約N-30°～40°-Wとなる。両者はほぼ直交した方向に延び、同一の地割に沿って形成されていることが推測される。

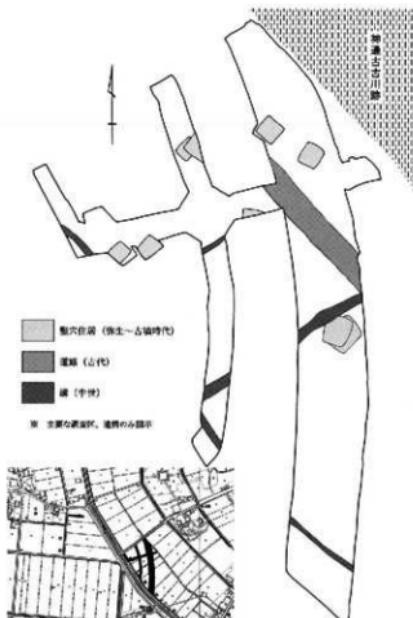
ところで、今回の調査とは別に平成15・16年度に行った道路改良工事に伴う本遺跡東部の調査では、弥生時代後期から江戸時代の遺構・遺物が確認された。詳細はそれぞれの報告に譲るとして、主要な遺構について新しい時期からみていくと、まず中世の溝は、本調査区と同様のN-60°-E前後、ないしはそれに直交する方向に延びるもののが主体である。古代では両側に側溝をもつ幅5.5～6.5mの道路跡が確認されている。この走行方向もN-45°-W前後で本調査区の地割の方位に近い。さらに、弥生時代末～古墳時代初頭を中心とする方形の堅穴住居もほぼこの軸に合わせて四辺を捕えているようである。

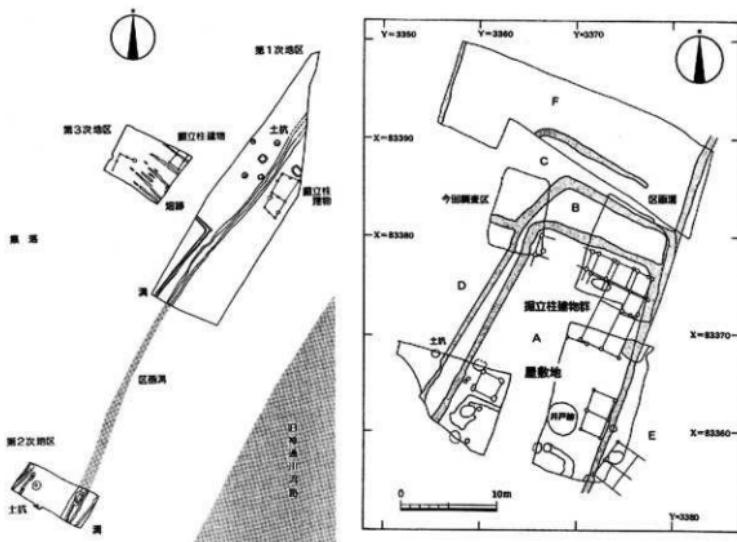
このようにみると、本遺跡周辺では弥生時代末～古墳時代初頭から中世までほぼ同一の地割のなかで集落が営まれていたことがわかり、遅くとも弥生時代末～古墳時代初頭には形成されていた地割を踏襲しながら古代、中世の集落も営まれた可能性が高いといえる。ただし、各遺構は厳密に同一の方位を指向しているわけではなく、ある程度の誤差を含み、比較的緩やかな枠組みのなかで理解される。平成16年度の道路改良工事に伴う発掘調査では「古古川」と呼ばれる神通川の旧流路が確認されているが、地割はこの流路の方向と

ほぼ一致している。このことから考えると、本遺跡付近の地割は方角を意識して形成されたのではなく、この古古川の流路方向に規定されたものと判断される。本遺跡の東に位置する四方北窓遺跡、四方荒屋遺跡でもおよそN-20°～30°-Eを地割にもつ古代・中世の集落が確認されているが、東側には「神通古川」と呼ばれる古古川以後の神通川の旧流路跡が存在し、この流路方向が集落の地割に影響したと指摘されている（富山市教委1998）。

以上のように、本遺跡を含めた神通川下流左岸域の地割は、各時期の神通川の旧流路という自然環境的な要因に大きく規定されていたことが推定できるのである。

第15図 道路改良工事に伴う発掘調査の遺構概略図（1:1,250）
(富山市教委2004を改変)





第16図 四方北窓遺跡（左1:800）と四方荒屋遺跡（右1:500）の遺構配置図
(富山市教委 1999、富山市教委ほか 1999)

<参考文献>

- 高橋浩二 2000 「古墳出現期における越中の土器様相」『庄内式土器研究XXII』庄内式土器研究会
- 田嶋明人 1986 「考察」『漆町遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター
- 田中幸生・中谷正和 2003 「越中における古墳出現前後の地域別土器編年」『富山大学考古学研究室論集 氣
樓』秋山進午先生古稀記念論集刊行会
- 中世岩瀬浜調査研究グループ 2003 「「海中から中世岩瀬浜を探る」15年度海底探査報告」『富山市日本海文化
研究所報』第33号 富山市日本海文化研究所
- 富山市教育委員会 1987 「富山市飯野新屋遺跡」
- 富山市教育委員会 1998 「富山市内遺跡発掘調査概要Ⅱ 四方北窓遺跡」
- 富山市教育委員会 1999 「富山市内遺跡発掘調査概要Ⅲ 四方北窓遺跡」
- 富山市教育委員会・富山市埋蔵文化財調査委員会 1999 「富山市四方荒屋遺跡発掘調査概要」
- 富山市教育委員会 2000 「富山上新保遺跡発掘調査報告」
- 富山市教育委員会 2004 「富山市打出遺跡発掘調査現地説明会資料」
- 日本考古学協会 2000 年度鹿児島大会実行委員会 2000 「はたけの考古学」
- 吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」吉川弘文館

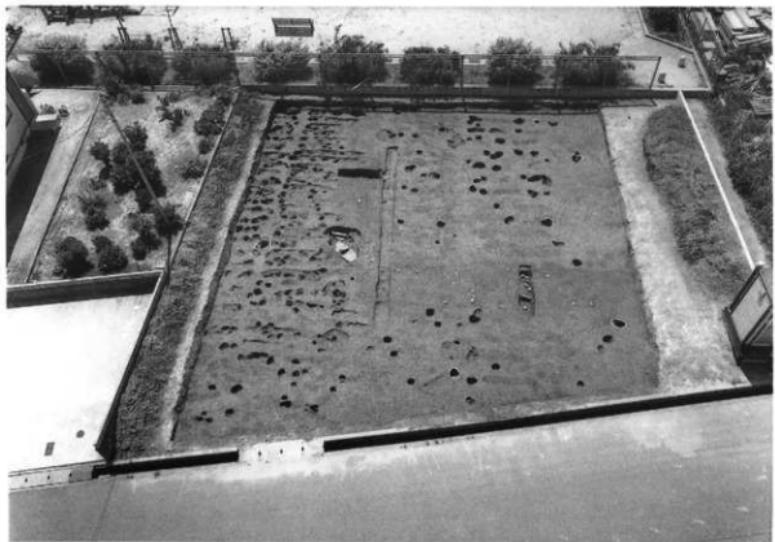


調査地周辺の航空写真（国土地理院 1992 年撮影）

1.百塚住吉D遺跡 2.打出遺跡



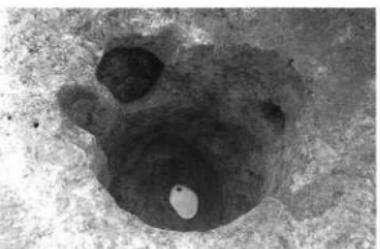
調査区遠景（北西から）



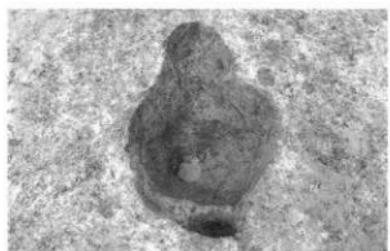
調査区全景（北東から）



SK01 (北西から)



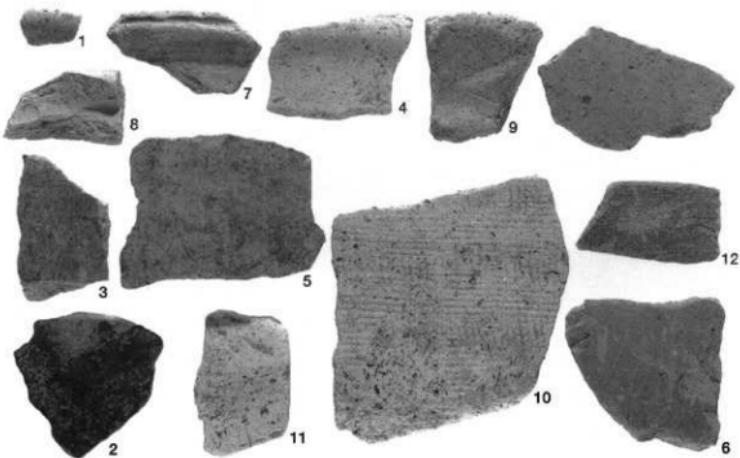
P01 (北東から)



P03 (東から)



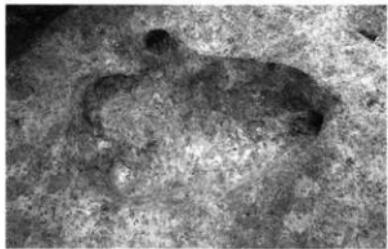
P07 (東から)



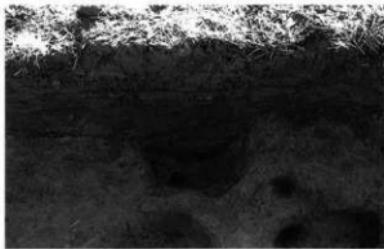
出土遺物



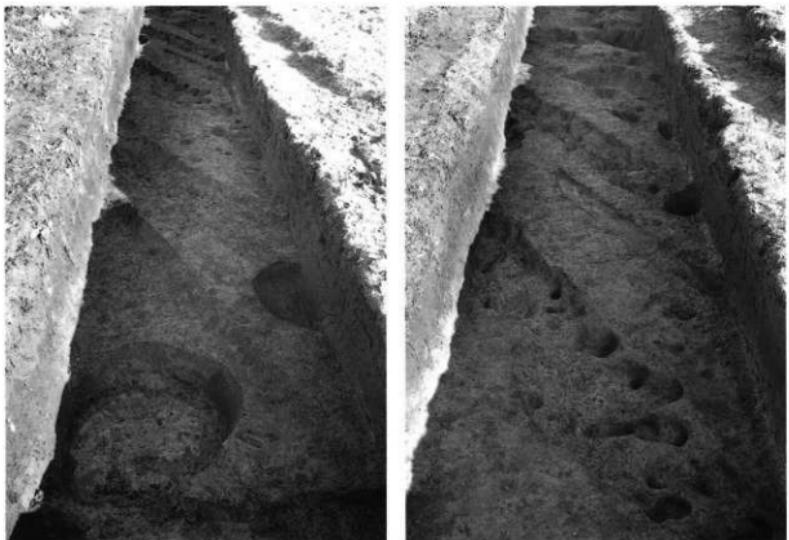
調査区全景
(西から)



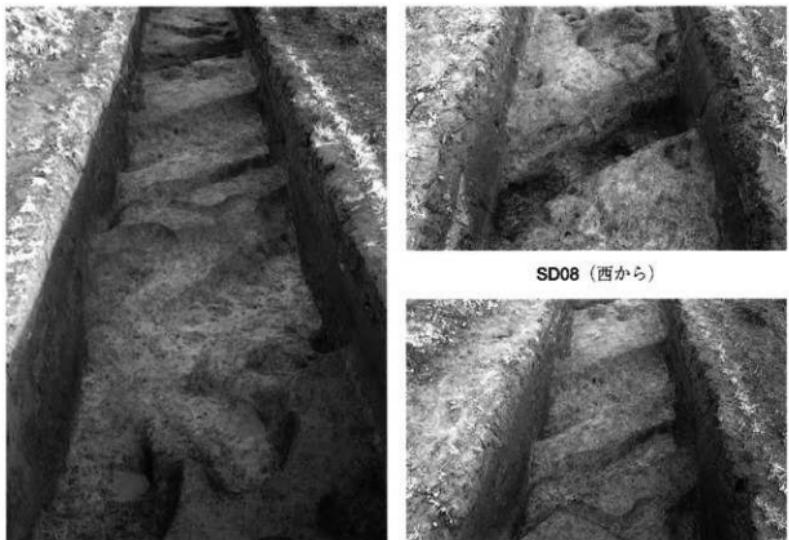
SK01 (北東から)



P01 (北から)



弥生時代末～古墳時代初頭の溝群 左：西部、右：東部（西から）

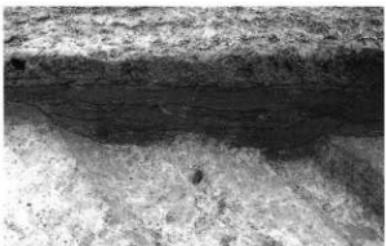


中世の溝（手前から SD10、09、08）（西から）

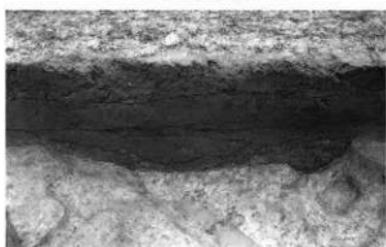
SD09（西から）



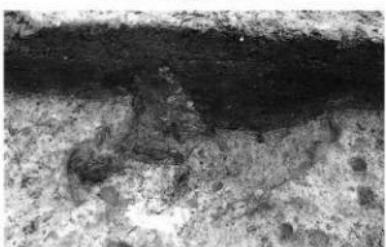
SD08 土層断面 (北から)



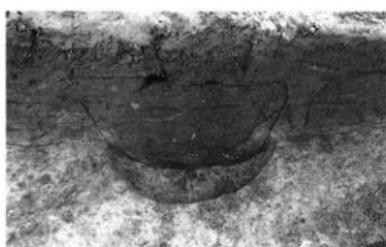
SD09 土層断面 (北から)



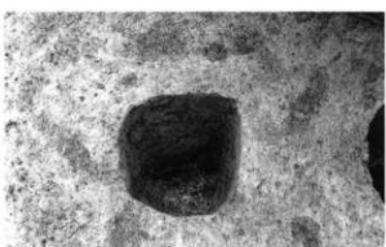
SD10 土層断面 (北から)



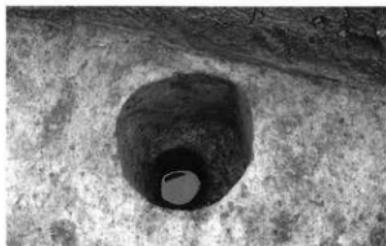
SK03・05 土層断面 (北から)



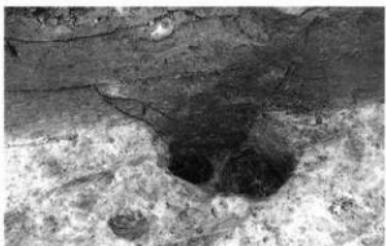
SK04 土層断面 (北から)



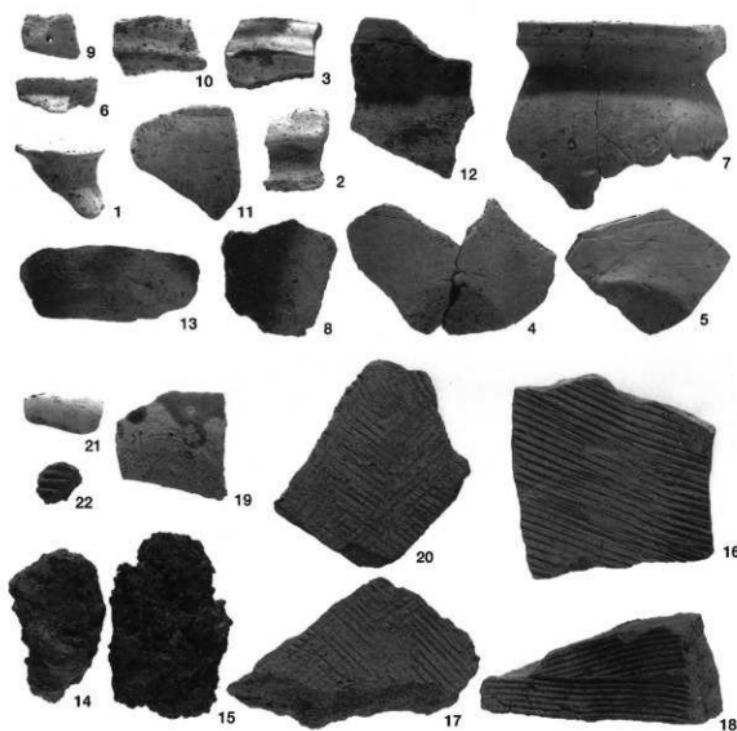
P03 土層断面 (南東から)



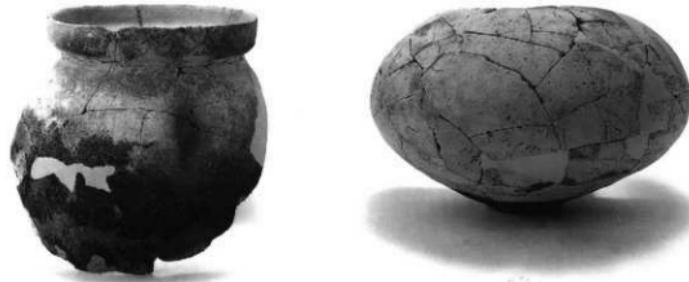
P04 土層断面 (南から)



P05 土層断面 (北から)



出土遺物



試掘確認調査出土土器

報告書抄録

ふりがな	とやましないいせきはくつちょうさかいよう・ろく							
書名	富山市内遺跡発掘調査概要VI							
副書名	百塚住吉D遺跡・打出遺跡							
シリーズ名	富山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	142							
編著者名	野垣好史・堀沢祐一							
編集機関	富山市教育委員会 埋蔵文化財センター							
所在地	〒930-0803 富山市下新本町5番12号 TEL 076-442-4246							
発行年月日	西暦2005年3月15日							
所収遺跡名	所収地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因	
市町村	遺跡番号							
百塚住吉D 遺跡	富山市宮尾	16201	183	36度 43分 28秒	137度 12分 13秒 ~ 20040525	210	個人住宅 建築	
打出遺跡	富山市打出	16201	9	36度 45分 04秒	137度 11分 28秒 ~ 20041214	55		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
百塚住吉D 遺跡	集落	平安時代	土坑、ピット	土師器、須恵器	土坑1基、ピット7基 を検出。			
打出遺跡	集落	弥生時代末～ 古墳時代初頭	溝(烟跡)、土坑、 ピット	弥生土器(古式土器)	烟跡とみられる 構造を確認。			
		中世	溝、土坑、ピット	珠洲、瀬戸美濃、中世上 部器、陶製円板、鉄滓	区画溝を確認。			
(百塚住吉D遺跡) 平安時代を中心とした遺跡である。搅乱のため検出遺構は少ないものの、出土土器の組成や焼付着の上器などから、調査地付近が生活の場として利用されていたことがうかがえる。本遺跡周辺では奈良時代以降、集落が大きく増加することから、木遺跡もこうした集落の興衰過程のなかで把握できると考えられる。								
要約 (打出遺跡) 弥生時代末～古墳時代初頭、中世の2時期の遺構・遺物を確認した。弥生時代末～古墳時代初頭では平行する溝群が検出され、烟跡と推定される。中世では区画溝を検出し、獨立柱埴物の柱穴の可能性があるピットも確認された。古墳時代の溝は直交する方向に延びており、周辺の調査事例も含めると、弥生時代末～古墳時代初頭から中世までほぼ同一の地割りのなかで集落が形成されたことが推測できる。これは神通川川底流路の方向に影響されたためと考えられる。								

富山市埋蔵文化財調査報告142

富山市内遺跡発掘調査概要VI

—百塚住吉D遺跡・打出遺跡—

2005年3月15日発行

発行 富山市教育委員会
 編集 富山市教育委員会 埋蔵文化財センター
 〒930-0803 富山市下新本町5番12号
 TEL 076-442-4246 FAX 076-442-5810
 E-mail : maizoubunka-01@city.toyama.lg.jp
 印刷 中央印刷株式会社

